

「自己中心の方向づけ」メタファーにおける異言語対照研究

— スペイン語・英語・日本語を通して —

福森 雅史

1. はじめに

本稿では、「自己中心の方向づけ（[スペイン語] la orientación Yo-PRIMERO / [英語] the Me-FIRST orientation）」表現における意味と統語との概念的結びつきを明らかにする。その目的は、スペイン語および英語母語話者の無意志的意識に潜む認知メカニズムを明らかにすることで、連語表現における構成語どうしの意味的整合性を観察し、実際の語彙学習指導に帰納させる論理とその有用性を提示することにある。

2. 「自己中心の方向づけ」表現における意味のからくりと体系化

2.1. スペイン語における「自己中心の方向づけ」表現

我々は日々、物を見たり、音を聞いたりすることによって、外界の様々な事柄を自身の感覚器官を通して知覚・認識している。こうした感覚の中でも、「目」は最も主要かつ重要な感覚器官であり、その「目」を受容器として行なわれる「視覚」行為が、次の(1)-(2)の記載に見られるように、人間の日常生活において極めて重要な位置を占めていることは言を俟たない。

- (1) 感覚器官は、それぞれ光線や音波など、この世界の中のある種のエネルギー（刺激）に応答し、そのエネルギーを感覚情報として神経系のエネルギーに変換するインターフェイスの機能をもつ。知覚過程は、これら感覚情報をそのほかの情報とともに用いて、外界で何が生じているのかを推定する。…ある感覚器官は、ある特定の刺激に対してだけ応答するようにできている。眼に対する光線、耳に対する音波がそれであり、このような刺激は適当刺激といわれている。…人間は視覚動物であるといわれるように、人間にとってもっとも主要な感覚は視覚である。

— 鈴木（編）（1997: 20-21）（下線・一部省略筆者）

- (2) 私たちは視覚、触覚、味覚、それから嗅覚、聴覚といった五感を駆使して、あらゆる情報を得ています。なかでも情報の8～9割は視覚で得ている、といわれているように、視覚は重要なものです。その視覚を得るために働いているのが、目なので

す。

－戸張（監）（2004: 50）（下線筆者）

このような視覚行為が言語に与える影響は、たとえば次の(3)のような語順にも及ぶ。

- (3) a. delante y detrás
 (前と後 → 前後)
 b. *detrás y delante

つまり、下記(4)に見られるような「自己中心の方向づけ（[スペイン語] la orientación Yo-PRIMERO / [英語] the Me-FIRST orientation）」¹という捉え方を重ね合わせて考えれば、人間は「目」のついている方向を「前」として認識しており、通常、様々な情報の大半を「目」で見て捉えていることによって、「後」よりも「前」の方向が日常生活において「身近」と感じている。

- (4) Since people typically function in an *upright* position, see and move *frontward*, spend most of their time performing *actions*, and view themselves as being basically *good*, we have a basis in our experience for viewing ourselves as more UP than DOWN, more FRONT than BACK, more ACTIVE than PASSIVE, more GOOD than BAD. ... This determines what Cooper and Ross call the ME-FIRST orientation: ...

This cultural orientation correlates with the fact that in English certain orders of words are more normal than others: ...

（人々は典型的に「直立 (upright)」姿勢で働き、「前方 (frontward)」で物事を見てそちらに移動し、自分たちの時間の大半を「活動 (actions)」を遂行することに費やし、そして自分たち自身を基本的に「善 (good)」であると見なしていることから、我々の経験においては、自身を「下方 (DOWN)」よりも「上方 (UP)」、「後方 (BACK)」よりも「前方 (FRONT)」、「消極的 (PASSIVE)」よりも「積極的 (ACTIVE)」、「悪 (BAD)」よりも「善 (GOOD)」であると見なす基盤を持っている。…こうしたことがクーパーとロスが言うところの「自己中心の方向づけ (The ME-FIRST orientation)」である。…

こうした文化的な方向づけは、英語の或る語順の方が他のそれよりも自然であるという事実と関連している。

－Lakoff and Johnson (1980: 132-133) (一部省略・下線・日本語訳筆者)

その結果、上記(3a-b)を学習指導する際、*detrás*が表示する「後」概念よりも *delante*が表示する「(視覚を基盤にした)前」概念が優先される認識でもって、**detrás y delante*ではなく *delante y detrás*が自然な語順として成立する理由を明示することが可能となる。

この「我々は『前方』という空間方向性をより『身近』に感じている」という認識は、下記(5)の記述に見られる精神病理学の観点からも支持される。

- (5) 精神医学者の宮本忠雄は、その著書『精神病理学における時間と空間』の中で、人は、前方と左右、そして上方の空間で、われわれが現実に「生きている空間」と、うしろの空間である「死んだ空間」を持っていると提唱している。「生きている空間」は世界に開かれており、「死んだ空間」はいつさいの環境との交渉を欠いていると考えられる。この考えを簡単に紹介するのは難しいが、その骨子は次のようなものである。

まず第一に、私たちが日常の生活を送っている「生きている空間」がある。

この空間のなかで、仲間と出会い、話をし、仕事をする。言い換えれば、

私たちが周囲の世界と交渉する空間のことである。

この空間の一つが人の体の「前方」である。前方は交渉が最も密で、しかも十分な広がりを持っている。他人と出会ったり、握手したり、話をしたりするとき、人は向かい合う。これらの交渉は前向き姿勢で行なわれ、体の前方が利用されているというわけである。… 第二は、いつさいの環界交渉を欠いた「死んだ空間」である。「うしろ」がこの空間で、環界との交渉をいとなまず、没交渉であり、世界と無縁である。そして、幻聴や妄想や作為体験の出現は、「死んだ空間」を舞台にすることが多いという。

— 渋谷 (1994: 79) (一部省略・下線筆者)

上記(5)に見られるように、我々は「前方」を周囲の世界と交渉するための「生きている空間」として捉え、また「後方」を一切の環界交渉を欠いた「死んだ空間」として捉えている。

我々が「後方」を「死んだ空間」として認識している一例として、「背」という漢字が挙げられる。なぜなら、我々の身体における最も身近な「後方」とは「背」に他ならないからである。この「背」という字は、以下(6)の辞書の記載に見られるように、

- (6) 会意兼形声。北〈ホク〉は、二人の人がせなかを向けあったさま。背は「肉+音符北」で、せなか、せなかを向けるの意。⇒北

－『漢字源』(s.v. 背) (下線筆者)

「北」という字に人間の身体を表す「月」を組み合わせてできた字である。この「北」という方角は、漢字を作った漢民族にとって「寒い地方」を表す。そのため、その方向に自然と「背を向け」るのである。このような身体経験が「北」という字の成り立ちに影響を与えたことは、次記(7)の辞書の記載からも明らかである。

- (7) 会意。左と右の両人が、背を向けてそむいたさまを示すもので、背を向けてそむく
の意。また、背を向けてにげる、背を向ける寒い方角(北)などの意を含む。

－『漢字源』(s.v. 北) (下線筆者)

更に、「北」は作物の実りも悪く、生活環境としても悪条件であるため、マイナスイメージとして捉えられる。そのマイナスイメージを持つ方角に、我々は「顔」を向けるのではなく「背」を向けていることから、「後方」は「前方」よりもマイナスイメージとして認識していることが伺われる。「敗北」という表現に「北」の字が使われているのは、「敗れて背(=北)を向けて逃げる」というマイナスイメージが言語に反映しているからに他ならない²。このように、我々は「生きた空間」である「前方」という空間方向性を「死んだ空間」である「後方」という空間方向性よりもより「身近な」ものとして認識していることが見出される。

したがって、等位接続詞で結ばれるこうした表現を理解範疇下で学習指導するには、次の(8)に示すように、「人間の認識体系として最も身近に感じられる語が一番初めに置かれる」という英語母語話者の認識に基づく必要がある。

- (8) The general principle is: Relative to the properties of the prototypical person, the word whose meaning is NEAREST comes FIRST.

This principle states a correlation between form and content. Like the other principles that we have seen so far, it is a consequence of a memtaphor in our normal conceptual system: NEAREST IS FIRST. For example, suppose you are pointing out someone in a picture. If you say

The *first* person on Bill's left is Sam.

you mean

The person who is on Bill's left and *nearest* to him is Sam.

(一般的な原則は：典型的な人間の属性と関連して、その意味が「最も近い」言葉が「一番初めに」来ることになる。

この原則は形態と内容とのあいだの相関関係を示している。我々がこれまで見てきた他の原則のように、この原則は我々の通常概念体系の中に存在するメタファーである NEAREST IS FIRST (最も近いことが一番初めである)の結果として生じたものである。たとえば、写真の中の或る人物を指摘して、もしあなたが次のように言うならば

The *first* person on Bill's left is Sam.

(ビルの左側にいる一番初めの人はサムだ)

以下のことを意味することになる。

The person who is on Bill's left and *nearest* to him is Sam.

(ビルの左側で彼の一番近くにいる人はサムです))

– Lakoff and Johnson (1980: 133) (下線・日本語訳筆者)

このことを以下(9)としてまとめる。

- (9) 「最も近いことが最初である ([スペイン語] MÁS CERCA ES PRIMERO / [英語] NEAREST IS FIRST)」メタファー：「より身近なものが先に頭に浮ぶ」

このように、人間の無意識的意識に深く根ざし、我々の認識に自然な語順を提示する「最も近いことが最初である ([スペイン語] MÁS CERCA ES PRIMERO / [英語] NEAREST IS FIRST)」メタファーを活用すれば、下記 (10a-b)

- (10) a. aquí y allí
(こちらとあちら → あちこち)
b. *allí y aquí

に示されるように、発話者の存在場所を表示する *aquí* の方が、それよりも「物理的な距離の隔たり」を表示する *allí* よりも統語的に先に位置されることになる。こうした「より身近なものが先に頭に浮ぶ」という性質は、上記(10)における「物理的場所」認識が「時は

空間である（[スペイン語] TIEMPO ES ESPACIO / [英語] TIME IS SPACE）」メタファーを通して「時」という「抽象的场所」に転用された場合も同様の捉え方が観察されることになる。その実例として、以下(11)が挙げられる。

- (11) a. ahora y luego
(今と後で)
- b. *luego y ahora

さらに、以下(12)–(14)に見られる連語表現の習得に関しても、これまで見てきた同じ概念体系の枠組みの中で学習指導することが可能となり、機械的な丸暗記にしか頼る術が無かった従来の方法論に楔を打つことが可能となる。

- (12) a. bueno y malo
(良いと悪い → 善悪)
- b. *malo y bueno
- (13) a. activo y pasivo
(積極的と消極的)
- b. *pasivo y activo
- (14) a. arriba y abajo³
(上と下 → 上下)
- b. *abajo y arriba

2.2. 英語における「自己中心の方向付け」表現

言語（表現）という「容器」そのものは相異なっているとしても、それを使用するのは「人間」という同じ生物であり、自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た経験こそが「人間の本質の産物」に他ならないことから、そこには「共通のもの見方」が存在すると考えられる。下記(1)がその詳細である。

- (1) Each such domain [= a basic domain of experience] is a structured whole within our experience that is conceptualized as what we have called an *experiential gestalt*. Such gestalts are *experientially* basic because they characterize structured wholes within recurrent human experiences. They represent

coherent organizations of our experiences in terms of natural dimensions (parts, stages, causes, etc.). Domains of experience that are organized as *gestalts* in terms of such natural dimensions seem to us to be *natural kinds of experience*.

They are *natural* in the following sense: These kinds of experiences are a product of

Our bodies (perceptual and motor apparatus, mental capacities, emotional makeup, etc.)

Our interactions with our physical environment (moving, manipulating objects, eating, etc.)

Our interactions with other people within our culture (in terms of social, political, economic, and religious institutions)

In other words, these “natural” kinds of experience are *products of human nature*. Some may be universal, while others will vary from culture to culture.

(そのような各々の領域 [= 基本的領域の経験] は我々の経験の内部で構造化される全体であり、今まで述べてきた「経験のゲシュタルト」として概念化されるものである。そのようなゲシュタルトは、繰り返された人間の経験内部で構造化された全体を特徴付けることから、「経験的に基本的なもの」である。それらは、自然な相（例えば、部分、段階、因果関係など）の観点から、我々の経験を一貫して組織化することを示している。そのような自然な相の観点からゲシュタルトとして組織化される経験の相は我々にとって「自然な種類の経験」のように思われる。

それらは以下の意味において「自然」である：この種の経験は以下のものから生じる。

我々の肉体（知覚的及び運動神経器官、知的能力、感情の気質等）

物理的環境との相互作用（移動、物体の操作、食行為等）

（社会的、政治的、経済的、そして宗教的状況内の観点からの）同一文化内における他の人々との相互作用

換言すれば、これらの「自然な」種類の経験は「人間の本質の産物」なのである。それらの経験の或るものは普遍的かもしれない一方、他のものは文化によって異なる場合もあるかもしれない。

– Lakoff and Johnson (1980 : 117-118) (下線・[] 内表記・日本語訳筆者)

こうした「自然な種類の経験」から得られる「共通のものの方」が存在するという考えに基づけば、次の(2)–(4)に示されるように、英語母語話者の無意識的意識においても同様の概念化が成され得ることは言を俟たない⁴。

- (2) a. front and back
(前と後ろ → 前後)
- b. *back and front
- (3) a. here and there
(こちらとあちら → あちこち)
- b. *there and here
- (4) a. now and then
(今とその時 → 時おり)
- b. *then and now

但し、筆者の教育経験上**2. 1.**の(9) (以下(5)として再掲)

- (5) 「最も近いことが最初である ([スペイン語] MÁS CERCA ES PRIMERO / [英語] NEAREST IS FIRST)」メタファー：「より身近なものが先に頭に浮ぶ」

の認識を学んだ学習者のうち数人から「次の(6a-b)に見られる back and forth の語順はなぜ*forth and back ではないんですか？」という質問を受けたことがある。

- (6) a. back and forth
(後ろと前方 → あちこち)
- b. *forth and back

こうした学習者に共通することは「back は『後ろ』で forth は『前方』、つまり『後ろ』と『前』の語順になっているのではないか？」と捉えてしまう点である。しかしながら、本論**2. 1.**の詳細な論述を通して上記(5)が導き出されたのだから、(何の妥当性もないとの考察に至らない限り) (6)で back が forth よりも先に書かれる背景にはやはり、(5)に収束する「身近なものが先に頭に浮ぶ」という認識が反映されていると考えなければ論理に合わない。ここで、言語の意味の側面を指導する上で不可欠となる研究アプローチとなる

のが「通時的観点」である。時の経過と共に各単語に次々と新しい意味が生まれてきた歴史的事実を鑑みれば、本来一つの単語には一つの「(派生的意味を生む際に中心的となる)意味」しかなく、それが時の流れとともに複数個の意味を生む役を果たしていることは歴史が証明している。故に、その時代時代の人々の様々な「認識」が一単語のそれぞれの意味として反映されているわけだから、意味変化のプロセスの歴史的考察が欠如することは、認知言語学の根幹である「人間の認識」の考察が欠如することと等価になってしまう。「共時」の積み重なりが「通時」であることは言を俟たない。意味変化(=概念変化)は「時の経過」と共に生じる。誕生したばかりの語の意味は一つのみ。そこから意味変化が始まるのである。

このような見地に立脚すれば、次の(7)–(8)に記されているように、backの原義は「背(中)」であるのに対し、forthは「前方(forward)」, すなわち「(自身よりも離れた)前の方向」であることが明らかとなる。

- (7) a. **back** (bæk), *sb.*¹ I. Original sense. 1. *properly*. The convex surface of the body of man and vertebrated animals which is adjacent to the spinal axis, and opposite to the belly and most of the special organs. It extends from the neck and shoulders to the extremity of the backbone.

— OED (s.v. back) (下線筆者)

- b. **back** n. 1 《OE》背；うしろ。◆OE *bæc* < Gmc **bakam* (OS, Mdu. & ON *bak* / OHG *bah* : cf. G *Backe* buttock) : cf. BACON. — adj. (《lateOE》) 《c1450》うしろの。◆ME *bak* -(n). — adv. 《c1390》うしろに。◆ME *bak* (頭音消失) - *abak* 'ABACK'.

— 『英語語源辞典』(s.v. back) (下線筆者)

- (8) a. **forth** (fɔθ), *adv., prep., and sb.* A *adv.* 1. Of movement or direction: Forwards; opposed to backwards.

— OED (s.v. forth) (下線筆者)

- b. **forth** adv. 1 《OE》前へ；(…)以後；外へ，見えるところへ；遠くへ。2 《15C》—《1607-8 Shak. *Cor* 1.3.96》国外へ。◆OE *forþ* < Gmc **furþa* (Du. *voort* / G *fort* : cf. Goth. *faúrþis* further) - IE **prto* - **per* forward : cf. FOR, FURTHER.

— 『英語語源辞典』(s.v. forth) (下線筆者)

したがって、「人間は体の一部である『背中 (back)』を身体から離れた『前方 (forth)』よりも身近に感じている」という一貫したメカニズムでもって上出(6)の語順を容易に学習指導することが可能となるのである⁵。これを以下(9)にまとめる。

- (9) back and forth : 人間は体の一部である「背中 (back)」を身体から離れた「前方 (forth)」よりも身近に感じている。

ここで、こうした認識と語順の関係について、映画 *GRAN TORINO* (邦題：『グラン・トリノ』) (2008) に見られる表現に目を向けよう。この映画 *GRAN TORINO* (2008) では、不良に何をされても言い返せない Thao にある女性とデートできるほどの強い男になれるように Walt が説教する下記(10)のシーンがある。

- (10) Walt: “Now you just gonna learn how guys talk. You just listen the way Martin and I banter it back and forth.”

(男ならどう話すか知っておけ。マーティンと俺のやりとりを聞いてみる。)

— *GRAN TORINO* (邦題：『グラン・トリノ』) <01:13:11>

(下線・日本語訳筆者)

ここでの back and forth では、語源から見ても back (背中) は forth (前方) よりも身体的に「身近」であるだけでなく、文脈から見てもここでの banter は「機知に富んだユーモアなどをまぜて言い返す」、つまり「一度自分の方に戻ってきた (back) 発言を前方へ (forth) 向けて言い返す」という意味であることから、back は forth よりも「優位」だと言えるのである。

2.3 日本語における「自己中心の方向付け」表現

— 日本人学習者の理解を進めるために —

「英語を英語で考えなさい」、日本の英語教育現場の視察中このような指導者の声を何度も耳にしたことがあるが、筆者の経験上、英語を母語としない学習者にとってそれは行ない得ないと断言する。それは英語のみならず、スペイン語においても同様である。助詞言語と語順言語の差異はもとより、母語とは生まれ育った言語環境に基づき自然と習得された幹となる言語であるのだから、それを無視して「英語を英語で考えなさい」「スペイン語をスペイン語で考えなさい」とする一方的な指導には首をかしげざるを得ない。ただ、

そういったことよりも、「母語と比較してなぜそのような違いが生じるのか？」という疑問を解決できるような背景知識を指導者自体が持つことは、学習者の知的好奇心を満たし、学習意欲を向上させる上で非常に有用であると考ええる。特に、筆者の教育経験上、機械的な丸暗記から脱却し得ない状況が外国語学習への興味を失わせる元凶の一因となっているのは否めない事実であろう。

このような観点からみると、上出**2.1.(10)**（以下(1)として再掲）

- (1) a. aquí y allí
 (こちらとあちら → あちこち)
 b. *allí y aquí

におけるスペイン語 aquí, allí や、上出**2.2.(3)**（以下(2)として再掲）

- (2) a. here and there
 (こちらとあちら → あちこち)
 b. *there and here

における英語 here, there 各々と比較して、その対応日本語訳では「あちこち = あちら (achira) - こちら (kochira)」と語順が逆になっている理由についても（授業中に直接指導する時間がないにしろ）教壇に立つ者は説明責任を果たせるだけの背景知識を持っておく必要がある。事実、筆者は本論**2.1.**及び**2.2.**の内容を学んだ数人の学習者から「人間という同じ生物として見方が同じであるのであれば、この現象はどのようにして考えたらいいのでしょうか？」と質問を受けたことがある。この学習者の意見は正しく、「最も近いことが最初である（[スペイン語] MÁS CERCA ES PRIMERO / [英語] NEAREST IS FIRST）」メタファーという比喻のフィルターを通して生じた結果であることは依然として何ら変わりはないとするスタンスは言語に接する上で非常に重要なモノの捉え方である。

結果から言えば、同じ「身近なものが先に頭に思い浮ぶ」という認識に基づいているとしても、スペイン語および英語と日本語との間では、身近なものとして焦点を当てる対象が異なっていると考えられる。つまり、日本語では実は「音」に焦点が当てられているのである。ここで achira の a という「母音」が kochira の k という「子音」よりも先に書かれているのは「母」と「子」の関係と同様であり、「母」が存在して初めて「子」が生

まれるわけなのだから、「母子／*子母共に健康」のように「母」が先に、「子」が後に書かれることになる。したがって、日本語訳が「あち (achi) こち (kochi)」という順序になるのは、我々が母音を子音よりも身近に感じ、母音が子音よりも優先された結果によっている、と指導するスタンスがここでは肝要となるのである。以上のことを下記(3)としてまとめる。

(3) あちこち：「あち (achi)－こち (kochi)」

◎この日本語表現においては母音が子音よりも優先されている。

「母音」が「子音」よりも優先する原則は、各々に相当する英単語 vowel (母音), consonant (子音) の語源を見ても明らかである。その詳細が次の(4)－(6)となる⁶。

(4) vowel n. 《c1308》 [[音声]] 母音 (字). ◆ ME *wowel, vowel* □ OF *vouel* (異形) ← *voile* (F *voyelle*) < L (*litteram* [sonum]) *vōcālem* vocal (letter [sound]) ← *vōc-, vōx* 'VOICE'.

－『英語語源辞典』(s.v. vowel) (下線筆者)

(5) voice n. 1 《?a1300 *Alisaunder*》(人間の)声. 2 《1604》(人の声に似た)音, (人の声にたとえられる, 天・理性などの)声. 3 《c1384 Wycl. Bible (1)》 [[文法]] 態. 4 《a1393 Gower》(表明された)意見, 選択, 希望. 5 《1607》歌う能力. ◆ ME *voys, voice, voiz* □ AF *voiz, voice* = OF *vois, voiz* (F *voix*) < L *vōcem, vōx* ← IE **wek^w* to speak (L *vocāre* to call / Gk *épos* word / Skt *vāk* voice / Aves. *vāχš* / Toch. A *wak*, B *wek* voice). — v. 1. 《a1438》述べる, 言う. 2. 《1607-12 Bacon》(感情を)言葉に表わす, (意見を)表明する. 3. 《1867》 [[音声]] 有声音で発する. ◆ ME *voyse (n), voice (n)* ← *voys (n)*. ◇語義3の初出例は過去分詞形 *voiced*.

－『英語語源辞典』(s.v. voice) (下線筆者)

(6) consonance n. 1 《a1420》一致, 調和. 2 《1589 Puttenham》 [[詩学]] 子音韻. ◆ ME *consona(u)nce* □ (O)F *consonance* □ L *consonantia* ← *consonantem* (pres.p.) ← *consonāre* to sound together ← CON- + *sonāre* 'to SOUND'¹ : ⇒ -ANCE.

consonant n. 《?a1325》 [[音声]] 子音. — adj. 《1410》(...と)一致 [調和] する.

ME *consonant* = (O)F = L *consonantem* : ⇒ -ANT. ◇ 名詞語義「子音」はL *consonans littera* からで、後者はGK *súmphōnon* (原義)「母音と共に発音するもの」のなぞり。

－『英語語源辞典』(s.v. *consonance*) (下線筆者)

ここから、*vowel*, *consonant* の捉え方は各々 (7a-b) に収束することになる⁷。

- (7) a. *vowel* の原義：「声に出す」
b. *consonant* の原義：「母音と共に [con-] 音 [-sonant=sound] を出す」

このように、母音 (a, e, i, o, u) が「主」で子音が「従」の関係にあることを学習者に意識づけることができれば、次の(8)–(9)でも、

- (8) a. 生き死に (iki · shini)
b. *死に生き

- (9) a. 遠近 (en · kin)
b. *近遠

「母音」は「子音」よりも「身近」であることを理解させ得る。これと同じことは *come and go* に対する日本語訳にも当てはまり、母音と子音が生ずる順序になって現れたのが「行ったり (ittari) 来たり (kitari)」であることから、(10a) と (10b) との語順の相違を同一のメタファーの観点から学習指導することが可能となるのである⁸。

- (10) a. *come and go*
b. 行ったり来たり (ittari · kitari)

さらに、以下 (11a-b) に示されるように、

- (11) a. 早晚 (sō · ban)
b. *晩早

熟語表現「早晚」が「早→晩」の語順になるのに対し、下記(12a-b)に見られるように、

- (12) a. 遅かれ早かれ (osokare · hayakare)
b. *早かれ遅かれ

同様の意味を表す連語表現「遅かれ早かれ」が「遅→早」の語順になるのも、「『母音』は『子音』よりも『身近』である」という観点から説明され得るのである⁹。

なお、次の(13a-b)に見られるように、

- (13) a. 老いも若きも (oimo · wakakimo)
b. *若きも老いも

連語表現「老いも若きも」が「老→若」の語順になるのは、上述の通り「『母音』は『子音』よりも『身近』である」という観点から説明され得るが、以下(14a-b)に示されるように、

- (14) a. 老若 (rō · nyaku)
b. *若老

これを音読みした場合の「老若 (rō · nyaku)」が「老→若」の語順として許容されるのは「中立的な意味を持つ方の語が身近である」と捉えられることからである。

通常、程度の大きい方の語は中立的な意味も持っている。例えば、次の(15)のように、

- (15) この鉛筆はどのくらいの長さですか？

長さの程度が大きいことを表す形容詞「長い」の名詞形「長さ」を用いた場合、「鉛筆」の指示物は長くても短くても良い。しかしながら、以下(16)のように、

- (16) この鉛筆はどのくらいの短さですか？

長さの程度が小さいことを表す形容詞「短い」の名詞形「短さ」を用いた場合、あくまで「鉛筆は短い」という前提条件が存在しているため、「鉛筆」の指示物が長い場合には用い

ることができない。このことから、「長い」という程度の大きい方の語には中立な意味が存在することがわかる。「老い≡年を取っている」という語にも、年齢を聞くときに「どのくらい年を取っていますか?」と言えることから、「老」が程度の大小に関わらない「中立的な意味」を持っていることがわかる。この法則によって捉えられる表現には、他に下記 (17a-d) が挙げられる。

- (17) a. 長短
- b. 大小
- c. 高低
- d. 深淺

また、この「中立的な意味を持つ方の語が身近である」という捉え方は、日本語だけでなく、スペイン語や英語にも見ることが出来る。以下(18)-(19)がその一例である。

- (18) [スペイン語]
- a. largo y corto (長短)
- b. grande y pequeño (大小)
- c. lejos y cerca (遠近)
- d. alto y bajo (高低)
- e. viejo y joven (老若)
- f. tarde o temprano (遅かれ早かれ)

- (19) [英語]
- a. long and short (長短)
- b. big and small (大小)
- c. far and near (遠近)
- d. tall and short (高低)
- e. old and young (老若)

上述のように、日本語の語順を決定する要因としては、以下 (20a-b) に示される2通りがあると言えるが、

- (20) a. 「母音」の方が「子音」よりも身近である。
b. 中立的な意味を持つ方の語が身近である。

いずれも「何を身近なものとして捉えるのか」という焦点を当てる対象が異なっているだけであり、結局のところ、「最も近いことが最初である（[スペイン語] MÁS CERCA ES PRIMERO / [英語] NEAREST IS FIRST）」メタファーという比喩のフィルターを通して生じた結果であることは依然として何ら変わりはない。

3. おわりに

以上、本稿では、人間の視覚認識の観察を契機に「自己中心の方向づけ」表現における意味と統語のインターフェイスを観察し、大脳内に潜むメタフォリカルなフィルターを通してスペイン語／英語／日本語における異言語対照研究の重要性にまで論旨は及んだ。スペイン語教師や英語教師の力量を向上させるものは何もカードを用いたり洋楽を聞かせたりするだけがその手法ではない。研究活動と授業内容とを別個に考え、前者が後者に反映され難いとする人たちは、自らの専門を応用させるレベルに至らず、かつオリジナル教材を授業に生かすための日常からの研鑽がまだまだ足りないということになろう。筆者は自戒の念を込めて言っている。スペイン語および英語母語話者が自身の経験を基に語（句）の意味を如何にして習得しているのかという「大脳内の後天的言語獲得装置」を明らかにし、状況に応じて実際の言語学習にそのメカニズムを適宜導入／活用する力量を教師自身が持つことも、昨今問題となっている「高等教育のさらなる充実」というFD課題を解消する方策の一つになり得ると信じて止まない。

<注>

- 1 「自己中心の方向づけ（[スペイン語] la orientación Yo-PRIMERO / [英語] the Me-FIRST orientaion）」のメタファーに関する現象の詳細な説明、及び明らかに矛盾する例についての議論について詳しくは Cooper and Ross (1975) 参照。
- 2 他方、「北」とは正反対の方向である「南」という方角は「暖かい地方」を表す。そのため、自然とそちらの方向に体の前面、即ち「顔」を向けるのである。更に、「南」は作物もよく実り、生活環境としても好ましい条件にある。このような経験から、我々は「南」をプラスイメージで捉えている。この捉え方は、「人を教え導くこと」を意味する「指南（する）」という語にも表れている。なぜならば、「人を教え導く」とは、「良い方向（＝プラスイメージ）へ導くこと」を指すのであり、決して「悪い方向（＝マイナスイメージ）へ導くこと」を指すのではないからである。
- 3 我々が arriba（上）を abajo（下）よりもより身近に感じている理由は、「大地の上に二本の脚で直立している」という我々人間の「活動時の姿勢」から説明され得る。我々の頭の「上」方に存在する物理的空間（特に高い空間を「空（そら）」と呼ぶ）が無限であるのに対し、我々の「下」方に存在する物理的空間、即ち足元には「地面」という限界が存在していることを我々は時に意識し、また時に意識することなく日常生活を営んでいる。こうした日常生活における経験から、我々は下記 [1] の概念を獲得していると言える。

[1] 上は無限、下は有限（[スペイン語] ARRIBA ES ILIMITADA, ABAJO ES LIMITADO / [英語] UP IS UNLIMITED; DOWN IS LIMITED）

他方、我々は、良いことや楽しいことは可能な限り続いて欲しいと思ひ、逆に悪いことや悲しいことは可能な限り早く終わって欲しいと思うことから、通常下記 [2a-b] を望んでいると思われる。

[2] a. 「良いこと／楽しいこと」は「無限」であって欲しい。

b. 「悪いこと／悲しいこと」は「有限」であって欲しい。

こうした我々の願望と先に見た「上は無限；下は有限」という認識が結びつくことで、次の [3] の認識が得られることになる。

[3] a. 「良いこと／楽しいこと」は「無限」に結びつくことから、「上」概念で捉えられる。

b. 「悪いこと／悲しいこと」は「有限」に結びつくことから、「下」概念で捉えられる。

このような理由から、我々は「上＝良いこと／楽しいこと」は「より身近」に、「下＝悪いこと／悲しいこと」は「より遠く」に感じていると考えられる。

- 4 当然のことながら、この「最も近いことが最初である（[スペイン語] MÁS CERCA ES PRIMERO / [英語] NEAREST IS FIRST）」メタファーという比喩のフィルターは英語やスペイン語以外の言語にも適用され得る。以下 [1]–[2] にその一例を示す。

[1] [ポルトガル語]

- a. frente e atrás (前後) / *atrás e frente
 b. aquí e alí (こことそこ) / *alí e aquí
 c. agora e logo (今と後で) / *logo e agora

[2] [フランス語]

- a. devant et derrière (前後) / *derrière et devant
 b. ici et là (こことそこ) / *là et ici
 c. maintenant et aussitôt (今と後で) / *aussitôt et maintenant

- 5 因みに、以下 [1]–[2] に示されるように、

[1] front (frant), sb. (and a.) 1. Forehead, face. 1. a. = FOREHEAD
 – OED (s.v. front) (下線筆者)

[2] front, n. 1 ((c1300)) ((詩)) 額. 2 ((c1375)) 前, 前面. ◆ ME *frount* □ (O)
 F *front* < L *frontem, frōns* forehead, front (Prov. *front* / It. *fronte* / Sp. *frente* / Port. *fronte*) ~ ?.

– 『英語語源辞典』 (s.v. front) (下線筆者)

現在では「前方」を意味している front は、本来は「額」を意味していたことが確認される。つまり、同じ「人体の一部」を表すのであれば人体の「前」にある「額」の方が人体の「後ろ」にある「背」よりも身近に感じられるのであるから、front and back という語順となるのは当然であると言える。

なお、以下 [3]–[4] に示されるように、

[3] fren · te 女 額, おでこ. — 男 1 前方, 前部; (建物などの) 正面.
 – 『小学館 西和中辞典』 (s.v. frente) (下線筆者)

[4] frónte 名 女 1 額; 解 前額部.
 – 『小学館 伊和中辞典』 (s.v. frónte) (下線筆者)

現在のスペイン語 *frente* 及びイタリア語 *frónte* では、今なお「額」の意で用いられている。

- 6 Vowel は voice と同源であることから、各々の意味の歴史的変遷を本論 2. 3. では(4)

-(5)として記載, また consonant は名詞形 consonance からの派生形のため(6)として一括記載した。

- 7 以下 [1]-[2] に示されるように, 韓国語にも日本語と同様の捉え方が当てはまり, 『『母音』は『子音』よりも『身近』である』とする「自己中心の方向付け」のメタファーを通して, その語順の仕組みが捉えられる。

[1] 왔다 갔다
wassda gassda
来たり 行ったり
(行ったり来たり)

[2] 여기 저기
yeogi jeogi
こっち あっち
(あっちこっち)

つまり, 韓国語の母音と子音の種類はそれぞれ以下 [3]-[4] であることから, 「行ったり来たり」に相当する韓国語の「왔다 갔다」は語頭が「ㅏ (와)」という母音, 「あっちこっち」に相当する韓国語の「여기 저기」は語頭が「ㄱ (여)」という母音であり, 日本語と同じメカニズムで上記 [1]-[2] の語順も説明される。

[3] a. 基本母音字

ㅏ (아)	ㅑ (어)	ㅓ (오)	ㅕ (우)	ㅡ (으)
ㅗ (야)	ㅛ (여)	ㅜ (요)	ㅠ (유)	ㅣ (이)

b. 合成母音字

ㅘ (에)	ㅙ (예)
ㅚ (애)	ㅛ (얘)
ㅜㅏ (와)	ㅜㅑ (외)
ㅜㅓ (워)	ㅜㅕ (웨)
ㅜㅗ (위)	ㅜㅛ (웨)
ㅜㅣ (의)	

[4] a. 基本子音字

ㄱ	ㄴ	ㄷ	ㄹ	ㄱ	ㅁ	ㄴ	ㅇ	ㅈ	ㅊ	ㅋ
ㅌ	ㅍ	ㅎ								

b. 合成子音字

ㄱ	ㄴ	ㅁ	ㅂ	ㅅ
---	---	---	---	---

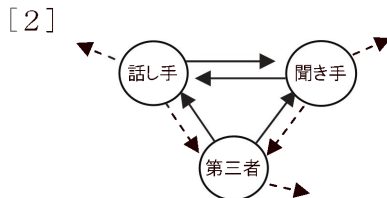
- 8 つまり, 英語母語話者は, 無意識的意識の内に go よりも come の方をより身近に感

じていることから、come and go の語順になると考えられる。この点に関し、日本の中等学校や高等学校における英語教育ではしばしば「come = 来る」、「go = 行く」と学習指導されることから、学習者の中には、英語母語話者は「自分が今いる所以外の場所に移動する」ことよりも「自分以外の者が自分のいる所に移動してくる」ことを身近に感じているのだと考える者が少なからずいると思われる。しかしながら、come と go は本来以下 [1a-b] の場合に用いられる。

[1] a. come : 「話し手または聞き手が存在している場所を移動の到達点としている」場合。

b. go : 「話し手または聞き手が存在していない場所を移動の到達点としている」場合。

なお、上記 [1a-b] に関し、come を実線矢印 (→) , go を点線矢印 (---→) で図示すると次の [2] として示される。



このことから明らかなように、英語母語話者が go よりも come を身近に感じているのは、come が「話し手または聞き手が存在している場所を移動の到達点としている」からである。

- 9 音読みした場合の「早晚 (sō・ban)」という語順は、英語での表現 *sooner or later* やスペイン語での表現 *antes o después* における語順と同様、「自己中心の方向付け」のメタファーの観点から説明される。つまり、「早」/「sooner (もっと早く)」/「antes (前に)」のグループと「遅」/「later (もっと遅く)」/「después (後で)」のグループとでは、前者のグループの方が後者のそれよりも「時間的に身近である」ことから生じた表現である。

<主要参考文献>

- Cooper, William E., and John Robert Ross (1975) "World Order." In Robin E. Grossman, L. James San, and Timothy J. Vance (eds.) *Functionalism*. Chicago : Chicago Linguistic Society.
- Cuenca, Maria Josep & Joseph Hilferty (1999) *Introducción a la Lingüística Cognitiva*. Madrid : Ariel Lingüística.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things : What Categories Reveal about The Mind*. Chicago : University of Chicago Press. (池上嘉彦 他 (訳) (1989) 『認知意味論 — 言語から見た人間の心』 紀伊國屋書店.)
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphor We Live By*. Chicago : University of Chicago Press. (渡辺昇一 (訳) (1986) 『レトリックと人生』 大修館書店.) (Carmen González Marín (trad.) (1986) *Metáforas de la Vida Cotidiana*. Catedra : Madrid.)
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh : The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. New York : Basic Books.
- Lindkvist, K. G. (1976) *A Comprehensive Study of Conceptions of Locality in Which English Prepositions Occur*. Almqvist & Wiksell International. Stockholm.
- Real Academia Española (=RAE) (1999) *Grammática Descriptiva de La Lengua Española*. Tomo. 1-3, Madrid : Editorial Espasa Calpe.
- Ungerer, Friedrich & Hans-Jörg Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman. (池上嘉彦 他 (訳) (1998) 『認知言語学入門』 大修館書店.)
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006) 『英語教師のための効果的語彙指導法 — 認知言語学的アプローチ —』 英宝社.
- 渋谷昌三 (1994) 『人と人との快適距離 — パーソナルスペースとは何か』 日本放送協会.
- 鈴木清 (編) (1997) 『人間理解の科学 — 心理学への招待 —』 ナカニシヤ出版.
- 高橋紀穂 他 (2009) 『FD改革下における語学教員への7人の新提案 — 認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から —』 星雲社.
- 高橋紀穂 他 (2010) 『英語前置詞の概念 — 認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点から —』 (FD 語学教育改革シリーズ 1) ブイツーソリューション.

- 戸張幾生（監）（2004）『治し方がよくわかる疲れ目・目の痛み』幻冬舎.
- 福森雅史（2007）『異言語間における動作主導入前置詞の概念研究－スペイン語・ポルトガル語・英語を通して－』（大阪大学言語社会学会博士論文シリーズ Vol. 42）大阪大学言語社会学会.
- 福森雅史・高橋紀穂（2009）「言語学と社会学のインターフェイスに基づく「前方－交換」概念の研究－語彙概念の導入による効果的な語彙習得へのアプローチ－」『語学教育部ジャーナル』第5号, pp. 27-45, 近畿大学語学教育部.
- 宮本忠雄（1965）「精神病理学における時間と空間」井村恒郎・縣田克躬・島崎敏樹・村上仁（編）（1965）『異常心理学講座10：精神病理学4』pp. 243-294, みすず書房.
- 森山智浩・福森雅史（2007）「英語前置詞 for, by とイスパニア語前置詞 por の概念メカニズムへの認知的アプローチ－異言語研究と教育－」『日本認知言語学会論文集』第7巻, pp. 109-119, 日本認知言語学会.

[辞書]

- Corominas* : Corominas, Joan & José A. Pascual (1980) *Diccionario Crítico Etimológico Castellano e Hispánico*. Madrid : Editorial Gredos.
- OED* : Simpson John Andrew & Edmund S. C. Weiner (1989) *The Oxford English Dictionary*. Second Edition. Oxford; New York; Tronto: Oxford University Press.
- 池田廉（編）（1983）『小学館 伊和中辞典』小学館.
- 片岡孝三郎（1982）『ロマンス語語源辞典』（ロマンス語言語学叢書 V）朝日出版社.
- 高垣敏博（監）（2007）『小学館 西和中辞典』（第2版）小学館.
- 田中秀雄（編）（1966）『羅和辞典』（増補新版）研究社.
- 寺澤芳雄（編）（1999）『英語語源辞典』研究社.
- 藤堂明保（編）（1991）『漢字源』学習社.
- 新村出（編）（1998）『広辞苑』（第5版）岩波書店.
- 山田善郎（編）（2004）『現代スペイン語辞典』（改訂版）白水社.

[DVD]

- GRAN TORINO*（邦題：『グラン・トリノ』）（2008：Warner Bros.）